

With Corona 時代の教育・研究



廣 川 健

新型コロナ第2波の到来に再び緊張感が漂いはじめている。このような状況下、大学の教育・研究について多くの方が腐心されていることと思う。学生達の自宅待機は一時解除され夏休みに入ったが、第2波で今後どうなるか心配である。座学はオンライン講義や自習で補えるとしても、化学系では実験ができないのは致命的なので、注意深く練習実験を開始されているところも多いようだ。特に新入生はオンラインのみだとモチベーションを失いがちではないかと心配である。また、卒論研究等はどうなっているのだろうと、心配になってしまう。

状況は違うが、ふと、昔のことを思い出した。50年余り前のこと、私の大学生活において一番インパクトのあった出来事は何と言っても大学封鎖であった。半年間講義がなく、卒論研究も半年間出来なかった。当時4年生だった私は、将来に不安を感じたものである。インターネットのイの字もなかった時代で、今のようにリモート講義ができるわけでもなかった。しかし、それなりにハングリーだったので、学生主体でお寺に講義の場所を借り、先生を招いて授業をしていただいた覚えがある。当時のことは今となってはほろ苦いが、良い思い出として記憶に残っている。

我々は With Corona の社会状況に影響されずに生きることはできない。コロナ世代の学生達にはなんとかこの時代をポジティブに生きてほしい。今後これくらい時間に余裕がある状況はあまりないはずだ。しっかりオンラインで勉強し、好きなことを見つけてほしい。これは現状では最善の策である。「一年やそこらは長い人生のあいだにいつでも取り戻せる」との気概が必要だ。

学会開催の重要性は言うまでもない。時下、当学会でも従来の対面式は中止し、オンライン開催になっているようである。当初は、会議ソフトやサーバーの選定・設定・運用で問題が山積みで、担当支部のご苦労はいかばかりかと想像される。しかし、オンライン方式が今後重要となることは論を待たない。国は学会が共同利用できる高性能なサーバーに予算をつけることを考えてほしい。またそのシステム作りに学会が先陣を切って取り組んでほしいと思う。我が国のIT化の遅れは深刻であり、このようなところからもテコ入れが必要ではないだろうか。

最後にお願いであるが、「ぶんせき」誌で、新型コロナウイルスの分析法をとり上げて、わかりやすく解説してほしい。と思っていたら、編集委員の方から、8月号以降に特集記事が出る予定との情報をいただいた。正直、もう少し早ければとも思うが、分析化学会の重要な社会貢献であり、教育面からは実分析の精度とか背後の問題を語るのに大変良い例である。暇な年寄りが好きなことを言うと思われるかも知れないが、このような厳しい時期こそ学会が反転攻勢をかける良いタイミングではないかと考えている。

(Takeshi HIROKAWA, 日本分析化学会中国四国支部参与)